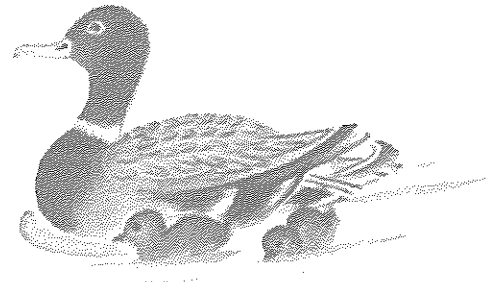


親鴨だより

2007年 12月号
第235号



親鴨会の皆様、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。小生、今年で古希を迎えお祝いにと、二人の娘が買ってくれたシニア用ドライバーを新兵器に下手なゴルフに再チャレンジしています。と同時に、古代ローマの歴史にも新たな興味を覚え晴動雨読の毎日です。

さて、小生、先日、福岡のH眼科病院で、白内障の手術の為、10日間の入院生活をしました。私は、この入院を通じ、視力の大幅回復と同時に、それとはまた別次元の大変貴重なことを教えてもらったと思っています。私は、これまで、体に一度もメスを入れたことがなく、たかが白内障とはいえ、手術に対しては、極度の恐怖心を抱いていました。それが、我家から遠く離れたH病院で、手術を行うことを決意することが出来たのは、初診の直談で、自ら執刀を約束してくれたH院長に対して抱いた絶対的信頼感とその背景にあります

H院長は、眼科医療に対する基本的取り組み姿勢として、ゲーテの最後の言葉として有名な“もっと光を”を引用し、この言葉を「私共の病院開設以来40年の行き方を象徴する言葉」と云っています。そして、さらに、「そのままほっとけば、生活の自由が奪われ、更に進めば、暗黒の世界に入らなければならない人々に“最高の治療を与え” “光ある”もとの生活に復帰させることが、私共の使命である」と述べています。私は、患者に対するこの取り組み姿勢に、いたく感動しました。

更に、院長は、以前、イギリスの有名な眼科病院を訪ねた際、「手術室に、“Operations Theatre”と書かれている。“Theatre”とは劇場のことで、人を感動させる芝居をするためには、主役と舞台装置だけでなく、脇役や裏方全員が協力して、初めて完成するものであることを示唆しているものだ。我々の眼科手術に於いても、正に其の通りで、患者に“最高の治療をあたえること”を目指し、H病院全体が、一致して、続ける。」と述べています。以上の通り、IBMの昔流の言葉を使えば、“Patient Oriented (患者中心)”で、“Team in Action (全員一致協力)”の重要性を力説しています。

そして、私が、何にもまして感銘を受けましたのは、10日間の入院生活を通し、院長の①患者第一主義②眼科医療に対する取り組み姿勢、即ち、“H-ism”が、言葉だけでなく、現実の姿として病院の隅々にまで徹底され、日常的に定着していることでもあります。

それは、医師、看護師は勿論のこと、受付、検査、給食、清掃の係りの人々にも及びます。

一人の例外もなく、全員親切でした。我々患者に対する本当に行き届いた心温まる対応に対しては、心の安らぎと感動すら覚えました。紙面が許せば、数々の具体例を紹介したいくらいです。

私は、僅か10日間の入院生活ではありましたが、H院長がこれまで、世界の眼科医学界に、多数の貴重な研究論文を発表し、常に、

“Look Beyond Japanese Medicine”と（日本の医療水準を超えた目）“患者中心”の目線で、強い使命感を持って、“Quality of Vision”に、取り組んでいる姿に直接、接し、彼をトップリーダーとするH病院での生活体験を通し、この世の中で、“相手を思いやる心から生まれる相互の信頼感”と“トップに立つ人間のあり方”が、いかに重要であるかを教えられた10日間の入院生活でありました。

このことは、大小に拘らず、総ての組織や集団、身近な、自分の家庭についても言えることではないでしょうか。

九州支部長 黒川 昌範